

1. 魔女『達』の隠れ家

よく晴れた日の昼下がりに。森の中にポツンと立つ一枚のドア。それを外側から押し開いて、私はドアの向こう側からこの森に足を踏み入れた。

カチャリと音を立ててドアを締めてから、私は振り返る。

「お姉さまーっ！ ただいまー！」

そして、現在地から少し歩いた場所にある一軒家に向けて、大きな声で帰ってきたぞと伝えた。

無事に声が届いたのだろう。一階のリビングにあたる場所の窓が開いて、『お姉さま』が顔を出した。

にこにここと笑って、こちらに手を振ってくれている。

離れていても、鮮やかな紫色の髪が風で揺れているのが見えた。

ここからでは見えないが、薄桃色の瞳が陽光に照らされ、キラリと輝いていることだろう。

私は早く『彼』に会いたくなつて。草の上を元気に駆けて行つた。草地を踏み締めて、逸る思いに自然と口角を上げる。

窓にはもう、お姉さまの姿はない。

けれど彼が奥に引込んだわけじゃないと、私には分かっていた。

「お姉さま、ただいまっ！」

「ふふ、さっきのも聞こえてたわよ。おかえりなさい」

ガチャリと玄関のドアを開けて。両手を開いて出迎えてくれたお姉さまの胸に、私は飛び込んだ。

私の勢いに負けずにしっかりと受け止めてくれたお姉さまは、優しく私の頭を撫でる。

ほんのりと甘い、お姉さまの香り。そんな良い香りに包まれなが

ら、私は彼の胸板にスリスリと頬擦りをした。

『『推し』カップルの門出だったわよね。楽しめたかしら？』

「うん、とっても！良い結婚式だった〜」

今日は、私がずっと応援していたカップルのハレの日だった。

だからこっそりと参列して、盛大に祝ってきたのだ。

「ぐふふ……♡義兄と義妹のCPカップリングって、なんであんなに美味しい

んだろう♡妹ちゃん、幸せそうだったなあ♡♡——まあそれより

も、義兄という名の性欲魔人の方がデレデレだったけど……」

私が妄想の世界に飛び立ったと、バレたのだろう。

お姉さまは私の腰に抱き着くと、軽々と私の体を抱え上げてみせ

た。そして私は縦抱っこをされたまま、彼の手でリビングへと移動する。

お姉さまは細身のように見えて、結構力持ちだ。

もちろん魔法による身体強化もあるが、それだけではない。

よく筋トレをしているし、私のことを日常的に持ち上げている成果でもあるのだろう。

——それにしても、見下ろすお姉さまのお顔が今日も麗しい。

しかも彼は心が——家族にだけは広いから。私が度々起こす奇行にも、引いたりはしない。

こんなこんなで、今日もとびつきり麗しくて素敵なお姉さま、レイニー。真っ直ぐ前を見据える彼のお顔が、私には輝いて見えた。

（ああ、すてきなお姉さま……♡）

煌めく桃色の瞳と、長い睫毛。それから、左目の下にある泣き黒子。少しだけ中性的な顔立ち美しく。私は下から彼の顔をじっと見つめながら、感嘆を漏らした。

そんな中、お姉さまはふと思い立ったように横を向く。そして彼

は、私の体から右手を離した。

それから彼は手の平を外に向け——少ししてから辺りに、カチャンと鍵が施錠される音が響く。

私はその音を聞いて、窓の外に向けていた視線を彼に戻した。

「私も早く、その魔法覚えたいなあ。そうしたら自由に外界と行き来、できるでしょう？」

私の問いかけを耳にして、お姉さまは足を止める。

すると見つめる先で、眉間にぎゅぎゅつと皺が寄っていった。

「迂闊なあんたは絶対に鍵の締め忘れをするから駄目よ。あたしに頼みなさい」

「えー」

この森は、ドーム状になっている比較的狭い空間だ。

多くの人々が暮らす外の世界とは少し違った次元にあり、行き来

するにはこの森にある、たった一つの特別なドアを通るしかない。

そしてそのドアは、普段は特別な魔法で施錠されている。

その上繋がる先の森では、ドア自体を魔法で消していた。

もちろんそれは、私達意外の人間が通ることが出来ないようにする
ためだ。

そんな徹底ぶりなのだが——一つだけ、問題がある。

それは、ドアの解錠・施錠の魔法が、私には使えないこと。鍵を
開けるのも、閉めるのも。それが出来るのは、私達のお師匠さまと、
兄弟子であるこちらの『お姉さま』、レイニーだけだ。

しかしながらお師匠さまは三年前に老衰で亡くなられたので、今
となつてはあのドアの解錠、施錠が出来るのはこのレイニーお姉さ
まだけ。

私も今みたく、その魔法を継承したいと度々訴えかけているのだ

が、すげなく断られるばかり。望み薄だった。

再び歩き出したお姉さまはリビングに足を踏み入れて、一旦私を床に下ろすとソファに座る。私は心得ていますとばかりに彼の膝上に乗ら上げ、向かい合う形に落ち着いた。

「どうしたら、教えてくれる？」

「んー??」

私は上目でジッと、彼の瞳を見つめた。

透き通るようなピンク色。

鮮やかで可愛らしい色は、見ただけで癒される。

けれど、癒されている場合ではない。一生懸命お願いしなくちゃ。

「ふふ、どうかしらねえ？」

「もう、いじわる。……んっ」

ムツと口を尖らせた唇に、ちゅっ♡と吸い付かれた。

毎度のことながら、ドツキンと鼓動が跳ねる。けれど慣れてはいるので、いつも通り私は気にしてないフリをした。

「あたしを置いて、あんたが居なくなるのが嫌なのよ。だから、『鍵』は教えないの」

「う……っ。そっか……」

自由に外と行き来が出来るようになったら、私がどこかに行ってしまうかもしれない。お姉さまは、そう不安に思っているのだろう。

だとしたら、もう何も言えない。私はガツクリと肩を落とした。

（きつと、お姉さまもお師匠さまがいなくなつて寂しいのね……）

すぐ傍に、ずーっとシクシク泣いて悲しむ妹分がいたから、お姉さまは悲しむに悲しめなかったに違いない。

私は、お姉さまが根気よく寄り添ってくれたお陰で大切な人を喪う悲しみから立ち直れた。

その副産物として、赤ん坊の頃から一緒に住んでいる彼に、コロツと恋に落ちてしまったわけだが——それは、置いておいて。

とにもかくにも、やっとお姉さまにも寂しく感じる暇が出来たというわけだ。

（これは恩義を返すためにも、私が全力で慰めないと……！）

——と、ちゅうちゅうと頬や鼻の頭に口付けられながら、私は決意を新たにした。

話をするために頭を後ろに引くと、柔らかな唇がちゅぱっ♡と音を立てて口から離れる。

「じゃあこれからも、外に出掛けなくなったらお姉さまにお願いするね。……負担には、なっていない？」

「もちろん。簡単にちよちよいと開けて、閉めれるもの。ただし、絶対に帰ってきてちようだいね？」

緩く笑んだ桃色の瞳が、すぐ目の前からジッとこちらを見つめてくる。探るような視線を受けて、私はにっこりと笑った。

「うんっ。絶対にお姉さまのもとへ帰ってくるよ！約束する！」

小首を傾げ、安心してと笑いかけてから、私はしっかりと頷く。そうすれば、お姉さまもにこにここと笑い返してくれた。

「んもうっ♡可愛いんだからっ♡♡」

また顔を寄せられて、薄く開いた唇の隙間に舌を射し込まれる。

「ん、ん……っ♡」

「ふふ……っ、ん♡」

お尻を左右から掴まれ、もちもちと揉まれながら。私は口腔内を隅々まで念入りに、舐め回されていく。

お腹の奥が熱くなって——あらぬところがじゅん、と潤ったけれど。私はまた、気付かないフリをした。

（——こういうの、困るんだよねあ……）

私はお姉さまの事が好きなのだ。

ガッツリバツチリ、恋愛対象として見てて出来ることならお付き合いたいと思っている。

けれどお姉さまは見た目こそ素敵な男性だが、中身はたぶん、女性だと思うし。キスや接触はあっても本番行為をしたことがない。

男性が好きなのか、それとも女性が好きなのか、分からなくて。

それでもキスをされたり体に触られたりするので、私は困ってしまうのだ。

私のことが恋愛的な意味で好きだと言ってくれるなら、それはもう「どうぞ、骨の髄まで食べちゃってください！」と盛大に足をパッカーンと開くの。明確な言葉がないので、どうすればいいのかが分からない。

「あーん♡本当に本当に、可愛い♡愛してるわよお♡♡」

「う、うん……」

明確な言葉——いや。昔から度々言われている『これ』は、明確な言葉と捉えてはいけない気がする。

「ふふふ、照れちゃって♡ほーんとたまんないっ♡んーっ♡」

「んう……！」

布越しの割れ目にゴリ、と硬いものが擦り付けられて。私は不意打ちの快楽に、口を吸われながらも声を上げた。

——そう。これも、困るのだ。

お姉さまはなんと、バツチリしつかり勃起しているのである。

しかしそれは、生理的な体の反応なのか、私を求めてのことなのか分からない。

いつそのこと、抱いてくれ！とすら思うのだが、それはそれで

『ただの性欲発散なのでは？』と疑って気を病みそうだ。

つまるところ本人に聞け！という一言に尽きるのだが、そんな怖いこと聞けるわけがない。

『あらやだ♡ あたしは男が好きよ？ ああ、勘違いさせちゃったのかしら。ごめんなさいね、これはただの生理現象なのよ』

なんて言われてみる。死ぬ。確実に死ぬ。間違いなく私の心が、死ぬことになるんだ。聞けるわけなどない。

「あら、もじもじしちゃってかあわい♡ あたしに悪戯されて、おまんこがムズムズしちゃったのかしら♡」

「っ、っっっ」

羞恥によって熱くなった頬を、指の背でそろりと撫でられる。

カッカッと熱を上げていく体は、相も変わらずお尻を掴まれて、おもちもちと揉まれていた。

「あんたってばすぐに真っ赤になつて、おまんこをトロトロにしちやうんだから……あたしは、心配なのよお。どこの誰かも分からない馬の骨に犯されて、泣いて帰ってくるんじゃないかって。ねえ？」

「そ、そんなことにはならないよっ！」

外界へのお出かけまで禁止されたらたまらないと、私は焦って反論した。キュツとお姉さまが着ているシャツを握り込めば、彼の垂れ目が更に甘く和らいだ。

「怪しい人には近付かないし……あ、ほらそもそも、お姉さまが何重にも保護魔法を重ねがけしてくれているでしょう？ 男性はおろか、女性すらも私には触れられない。だから、ね？ 絶対大丈夫！」

「それは、そうだけど……」

右手の人差し指を唇に当てて思案する様子は、なんとも艶やかだった。桃色の瞳の中では魔力の煌めきが渦巻き、キラキラと光を放

っている。

「でも、あたしとこうしてくつついてるだけで、あんたは濡れているでしょう？ 良い男を見つけたら、それだけでおまんこをぐずぐずにさせるんじゃないかしら」

「あっ、そん、なこと」

美しい光景にぼうっと見惚れていると。

お姉さまは唇に当てていた指を外し、その手を下ろしていった。そろりと服の上から撫でられた足のあわい。

スカートの裾からその手は侵入し、下着の横から長い指が——潤んだ割れ目を撫でる。

「——ほら、こんなに濡れて」

「あ、あ、おねえさま、だめ……っ」

くちゆくちゆと音を立てながら、ヒクつく穴を撫でられる。

短く切り揃えた爪で蜜口をカリカリと引っ搔かれ、更には時折、指先をくふんと埋められた。

「どうして駄目なの？きちんと、襲われても拒絶できるって証明しなさいな」

「あうっ、あ、んっ♡ひあっ♡」

そもそも、お姉さま以外は私に触れられないのだけど。

お姉さま以外には、こんなに感じたりしないのだけど。

私はお姉さまが納得する反応と回答を、しなければならぬのだろう。けれど入り口の周りをしつこくぬるぬると撫でられ、たまにクリトリスをピンと弾かれて。私は思考が働かなく、なついていく。

「クリだってこんなに硬くして……。ここを下着の上からカリカリされたら、誰が相手でも股を開いちゃうんじゃないの？おまんこをドロドロにして、ぶっといちんぽを根本までズツプリ♡と刺されて。

イクイクしながら精液を一番奥で受け取って、知らない男の子供を
孕むのよ、きつと」

「そんなにや、ことおっ♡なあ、あっ！アッ♡」

遂には彼の長い指を一本、ずぶり♡と中に振じ込まれて。既に熟
知されている弱いところをたくさん、ナデナデ♡される。

浅いところをゴリゴリ。奥の行き止まりをカリカリ。

プルプルの肉ひだはじゅりじゅり♡と擦られる。

腰は戦慄き、背は反っていく。彼の左手が背中に当てられ、後ろ
に倒れそうになる体を支えてくれていた。

「舌、出さない」

「ふあ、いっ♡」

言われた通り、れっと舌を前に出して。そこをすぐさま、私のも
のより肉厚な舌で舐めしゃぶられる。

突き出した舌をじゅるじゅると吸われ、時折歯を立てられながら。私は執拗に、膣内を掻き混ぜられていった。

「——も、もお……っ♡」

「あら。もう、イくの？ 早いわねえ……♡ やっぱりこのおまんこ、敏感すぎじゃないかしら？」

そうしたのは、お姉さまなのに。

毎日のように指や口で可愛がって、開発したのは貴方なのに。

私は迫りくる絶頂で上手く反論出来ないながらも、彼のことをキツと睨み付けた。

「まあ、反抗的ね♡お仕置きにもっとおまんこをダメダメにされたのかしら。ああそれとも、そろそろお尻も舐てくさいってこと？」

「おし……!!? あ、はあっ♡」

背中当てられていた手が再びお尻まで下りて、スカートを捲り上げた。そして下着の上から、後孔をスリスリと上下に撫でる。

「んあっ♡あ、あっ！だめ、おねえさま……っ！」

「ふふ、困惑しながらいきそうになって可愛いわね♡ここは追々、開発していきましようねえ♡♡」

しっかりと拒絶しないといけない彼の提案も、膣内を掻き混ぜられる刺激で右から左へ流されていく。

一度抜けた指が増えて戻ってきて。ぐちよぐちよと音を立てながら、私は激しく責め立てられる。

「イ……くっ♡イク、イクうっ♡♡♡」

「はあ、たまんない♡♡あまりにも可愛すぎて、頭の先からてっぺんまで、ゼーんぶ食べちゃいたいくらいよ♡♡」

反らした喉をねつとりと舐められながら、時折かぷりと歯を立て

られる。戦慄く腰は支えられ、蠕動する膣内は容赦無く嬲られた。迫り来る頂きに目を白黒させていると今度は開きっぱなしの口にパクリと食らい付かれて。口腔内に熱い舌が入り込み、口内を余すところなく舐め回されていく。

「イツ、ううううっ！」

「あゝん♡♡あたしの可愛い仔猫♡♡うふふふ♡♡んー♡♡」

キティ

体の奥に蓄積した熱を弾けさせ、強く彼の手を締め付ける。そんな私のビクビクと痙攣する体を、お姉さまがギュギュと強く抱き締めた。

頬と頬を擦り合わせられ、達している最中にもズリズリと蜜道を擦られて。バチバチと光の粒が弾ける視界に時折桃色が映り込んだ。

「可愛い♡かぁわいい♡大好きよ♡すーき♡」

「あっ、んん……！や、きつい♡♡」

更に指が増えて、潤みに潤んだ膣内がぼちゅぼちゅと音を立てながら蹂躪される。

小刻みに震える体は、彼の腕の中。

思考は上手く働かず、何事かをしきりに囁かれる私が出来ること
は、ハクハクと唇を動かしながら快楽に身悶えるのみ。

「もー♡ほんとーに可愛いんだから♡♡あたしが束縛するのも、
仕方のないことでしょう？だってこんなに愛しているのだもの♡♡」
ねー♡と語りかけられながら、私はまたスリスリと頬に頬擦りを
された。あまりの勢いに頭がグリングリンと動く最中で、恐らく三
本だろう指を、ぶぢゅんっ♡と根本まで挿じ込まれる。

「んああ………！」

「んふふっ♡いい声♡♡」

今度は頬に鼻先に額にと、顔中に口付けの雨を降らされる。

それでも彼の指は巧みに動いて、私の弱いところを的確に撫でていった。

「ふ、んん……ッ！アツ、ああっ！らめ、いくっ♡また、イツ♡♡くくっ♡」

「……ふふっ♡じょーず♡だあいすきよ♡♡♡」
イイコイイコと褒めるように。絶頂で震える体を撫で回され、またしても頬と頬を擦り合わせられる。

脳内は白く霞み、きつく引き絞る膣内では彼の指が動きづらそうにゆったりと前後していた。

「この箱庭で、ずーっと一緒に暮らしましょうね♡♡♡」
ちゅうっ♡と唇を優しく、吸われてから。

未だ絶頂の余韻で放心している私は、やけに甘い声色で名前を呼ばれた。

2. 私がここにいる理由

この肉体を得て、早二十年。

しかし生を得てからは、もう四十五年にもなる。

元々私は、日本という国で暮らしていた働く女性だった。

けれど二十五歳の時に不慮の事故で命を落とし、ふと気付いた時には真っ白な空間にいたのだ。

足元を見れば、そこに体は無く。ああ魂の状態ってやつなのかなとぼんやり考えれば、目の前に立つ真っ白な女性が口を開いた。

『あらあゝごめんなさいねえ。あたくし、間違えちゃったのお』

鼻にかかったやたらと甘ったるい声で、その女性は私にことの経緯を説明した。

何でも、私の魂は寿命で天寿を全うするまで生きる予定だったの

だが、女神様のミスで予定よりかなり早く死んでしまったらしい。

『でも、肉体は壊れてしまったし……。どうしようかねえ……。』
ふう、と悩ましげな溜め息を吐いた女神様は、『これじゃあダーリンに叱られちゃうわ』と溢した。

——その瞬間。私の心は色めき立った。

文字通り、心が踊っているのだろう。

視界がアチコチにブレ、私のことを目で追う女神様の視線が、それに合わせて上下していた。

『……あらあ？ あなた、男女の色恋沙汰が好きなの？ しかも、他人の？……え、なに？ しーぴーちゅう？ なぁに、それ』

喋ることは出来ないが、彼女に私の意思は全て、伝わっているよ
うだ。

私（魂のみ）はぴよんぴよんと上下に跳ねながら、いかにNLの

世界が素晴らしいものかを語った。

そう、私は無類の美男美女カップル愛好家だったのだ。

昨今話題の西洋風創作カップルなど、特にドストライク過ぎて――漫画も小説も読んでいると、不審な笑いが口から漏れてたまらないくらいである。

そんな私の趣味趣向を理解した美人の女神様は、若干引きつつも「そう」と応えてくれた。

そしてそれを踏まえた上で、今後の私の処遇についての提案してくれる。

『あたくしの管轄の世界に、あなたの云う西洋風の世界があるの。だからあ、そこに転生させてあげるわ。そおすれば、あたくしもダーリンからお仕置きされないで済……きゃあっ！あなた、喜びすぎよお！』

美女女神が恋人からお仕置き!!!と大興奮したのがいけなかったのだろう。

最早視界は焦点が定まらず、一瞬だけスンツと落ち着いた隙にドン引いている女神様の顔が見えた。

そうして私は暫く、狂喜乱舞をして。それからどうちか落ち着きを取り戻した頃には、女神様は不快な虫けらを見るようにしてこちらへ視線を送っていた。

そして、シツシツと掌を振る。えへへ、ご褒美ですと私がテレテレしていると、どうやら本当に転生をするようだ。

『とにかく、謝罪はするから許してちょおだいねえ。あなたが喜びそうな特殊能力もおまけしてあげる。それじゃあね〜』

ヒラヒラと手を振る白い美人が薄れていき、しまった彼氏の属性を聞いていなかったと後悔した瞬間。

赤子に生まれ変わった私は、パンツ一丁で森の中に、ポツンと放置されたのだった――

（あの女神様、きつとかなりのおっちょこちよいなんだろうなあ）
赤子を何の準備も無く森の中に送った。しかもそれは、幼いレイニーとお師匠さまのみが暮らしている特殊な空間なのだ。

そうとは知らずに女神様のバカーツ！とオングヤアオングヤア泣いていると、運良くすぐにお師匠さまが通りかかって保護されたから、よかったものの。そうじゃなければとつくに私は、生き絶えていたことだろう。

なんてことを、と思うけど。女神様はきつと、杜撰な転生方法について彼氏さんからお仕置きをされたことだと思う。なので、それでチャラにしている。おいしい。

（いや、待って。今気付いたけど、ダーリンと言っただけだから

夫の可能性もある。じゃあ、孕ませ——」

じゅる。唾液を吸ったところを、横からひよつとこりと現れた美貌に覗き込まれる。

お姉さまだ。桃色の瞳でジッ、と口許を見つめられて慌てて袖で口許を拭う。

「だらしのない顔しちゃって。何を考えてたの？」

元の世界ではもう死語にあたるかもしれないが、『萌え』というものについてである。

しかしそれを説明するのは難しく、私はとりあえずいつもの表現方法に逃げることにした。

「いやあ、推しカップルについてで……へへ」

お姉さまは、「あらそう」とでも言うように片眉を上げて、私から離れていった。

私は彼の後を追ひ、家の中に入る。

すると彼から漂ってきた残り香が、鼻腔を擦った。

——あ、まただ)

ふんわりと香ったのは、甘い香り。

恐らくは女性モノだろう、香水の香りだ。

私の胸が、きゆうっと切なく締め付けられる。

ひと月ほど前から、お姉さまから微かに香るようになった甘い香

り。それは毎回、お姉さまが外界から戻ってきた時に香っていた。

香る度にちよつとずつ違うように思うけれど——同じ系統だから、

きつと同一人物からの移り香なのだろう。

人から香水の匂いに移るといふことは、それほど近くに居るとい

うことだ。

(外界に、いい人でもいるのかなあ)

だとしたら、かなり寂しくて、悲しい。

私にあんなにエッチなことをしておいて、という憤りもある。

キッチンに向かっていった彼の背中を見送りながら、私はそつと溜め息を吐いた。

（もういい加減、その気がないならいって態度で示してほしいな）
可愛いや好きは日常的に言われているが、きっとそれは家族愛だ。
何せ、お姉さまは私が本当に幼い頃から——一日五回は私のことを「可愛い♡」と褒めて、毎日「大好き♡」とハグをしてきたのだ。

それは私が二十歳、彼が二十五歳になった現在でも変わらない。

もしもそれが恋愛による感情ならば、お姉さまは私が初恋の相手
で、その上で十数年もの間、一途に愛し続けていることになる。

だから性愛の意味合いで愛されていると決めつけてしまうことは、
あまりにも自惚れ過ぎなのだ。

——そう、分かっているのに。毎回胸が高鳴り、それでいて私は期待をしてしまう。

こういった煮え切らない関係が続くこと、早二年。

きっかけは分からないが、私が十八歳——成人を迎えてから、彼は私の体に触れるようになった。

キスもお触りも、嫌じゃない。

それどころか触れてもらうことも、こちらから触れられることも、嬉しい。

けれど理由が分からなくて——ひたすらに、悶々としているのだ。寧ろ最近ではあまりにも悶々とし過ぎて、もういつそのこと自らの手で希望を潰してしまおうかとすら思う。

そう、例えば——お姉さまに、『ラッキースケベ魔法』を使って。お姉さまが好きな人と、ラブラブになるところを見届ける。そうし

て、この恋心を粉々に砕けば――

（なんてね。そんな勇気なんて、無いのにね）

それにそもそも、彼に好きな人がいるかも知らない。

でも何れにせよ、きっと私はお姉さまと両想いにはなれない。
けれど、好きなものは好きなのだ。

この想いを蔑ろにしたくはない。自分で壊す勇気など無い。
彼との関係に亀裂を入れるなんて、もつての他だ。

だから結局は、現状維持。

そしてひっそりと、大切に。

胸の内側にこの想いを抱えて、また悶々と悩むのだ。

――そんな風にセンチメンタルな気分に浸った日の翌日。

私は最悪な夢見のせいで、最悪な朝を迎えていた。

3. 失恋と決心

私が女神様から授かった力は、相手に注視すれば想い人がいるか分かる、という効果と。想い人がいる場合は相手との関係性が分かるというものだ。

その能力を使って、もし恋い焦がれる相手と両想いなのに擦れ違っていたり、上手くいっていないと知ったら。私は、その人にエッチなハプニングばかり起きる魔法を付与して、関係を後押しする。そうして晴れて、想い合う男女はハッピーエンドになる——というのがいつもの流れであつた。

女神様が下さった力は本来、小さなアクシデントを起こすくらいの魔法だった。

けれど私が情熱を注ぎ込み、改良に改良を重ねて——今の形に落

ち着いたのだ。

魔法をかけた人と、その人と両想いである異性が二人きりになると、一定時間はそこに第三者が近付かない。二人の気持ちを燃え上がらせるような、エッチなハプニングが起きる。けれど互いに嫌なことは出来ない——など。発動に条件が有り、不同意の行為が出来ないようにと制約が付いた、安心安全のラブエッチ魔法なのだ。

本当に、女神様が私に魔力の器を与えてくださって助かった。そのお陰で魔法が無い世界で魂を得た私でも魔法を——つとと。

少々脱線したが、とにかく。まず私は通称『ラッキースケベの魔法』を使って良いかどうかの判断のために、その人を注視する。

そして私は、お姉さまが誰かに恋患っていると知りたくなかったから、絶対にお姉さまだけはそういった意味で注視しないようにしていた。

けれど、たった今。いや、つい先ほどまで。

魘されながら見ていた夢は、まさにお姉さまの気持ちを盗み見たものだった。

直接彼を前にせずして、何故気持ちを覗き見てしまったのか——それは分からない。

もしかしたら寝る前に彼のことを考えていたからかもしれないが、見てしまった今となってはもうどうでもいい。

「……あーあ」

すごくすごく思いが深くて、あたたかくて、熱くて、それでいてドロリとした執着だった。

いつもながらイメージを盗み見るだけなので想う相手の顔や素性などは分からなかったのだが——寧ろ、それでよかったのかもしれない。

お姉さまがあんな風に人を愛するなんて知らなかった。

——知りたくも、なかった。

（あんなに愛されて、羨ましいなあ）

でも、これじゃ絶対に敵いっこない。

だってびっくりするくらい、一途で、重かったんだもん。

お姉さまがまさかそんなって、ちよつとだけ信じられなかったくらいだ。余所見なんてしてくれるわけがない。

——でも、一つだけ分かったことがある。

「……お姉さま、女の子が好きだったんだなあ」

私が気持ちを盗み見ることが出来たと云うことは、『思い合う男女』であるということ。

つまりお姉さまが愛している相手は、女性なのだ。

（私じゃ、だめですか？なんてね。ははは……）

そんなよくある台詞も、言えないほどの溺愛ぶりだった。

相手の女性も、きっと幸せだろうなと考えて。ふと、気が付く。

お姉さまが相手の女性に対して、『受け入れてほしい』と願っていたことを。

（お姉さまも、私がこれまでくつつけたカップルのように——想いと擦れ違っているのね）

夢の中で見たイメージは、両想いのものだった。

けれど相手の女性の気持ちが、お姉さまにはきちんと伝わっていないのだろう。

私は勝手に流れ出ていた涙を袖で拭って、寝台の上へ立ち上がった。そして、右手をグーにして天井に突き上げる。

（こうなったらお姉さまとお姉さまの好きな人の、恋のキューピッドになってやろうじゃ、ないのっ！失恋なんて、何のその！お姉

さまの幸せは、私の幸せっ!!)

小さな声でうおおおっ!と叫んで、私は何度も拳を突き上げる。涙がまた溢れてくるし、この勢いが空元気なのは分かっていた。

でもこうでもしないと、私はまたシクシクシクと泣いて、お姉さまを煩わせてしまうことになるだろう。

お師匠さまが亡くなった時は仕方なかったとしても、失恋の傷を失恋した相手に癒してもらうなんてあり得ない。

それにそんなことをすれば、意図しても意図せずしても、お姉さまとお相手の女性の仲を、裂いてしまいうさだ。

いくら失恋が辛くとも、そんなことはしたくない。

(だから私は、全力でお姉さま恋を応援する……!)

そのためには、決行の計画を練らなくては、と――

私は真面目腐った顔をして、寝台の上に座り直した。

この世界にはかつて魔法が存在し、今では潰えた力だと認識されている。

よって現在残っている魔女ないし魔法使いは、私とお姉さまだけだった。

もしかしたらこの森みたいに、人には認知出来ない場所でひっそりと暮らし、それでいて外界で擦れ違っている魔女もいるかもしれないが——私達には、それを知ることとは出来ない。

そんなこんなで、日々のんびりと過ごしているお姉さまは、意外と隙が無い。

外の世界で魔法つか——いや。魔女だと勘付かれると不味いから、気を抜いているようにいても気配には敏感なのだ。

だから不意打ちは難しい。例えば相手が妹分の私でも、不穏な気配

はすぐに察知してしまう。

幼い頃から、悪戯をしようと背後に迫ったものの、バレていたと
いうことが何度もあった。

そんな経験を踏まえた上で、私は考えたのである。

隙が無いのなら——無理矢理押し通せばいいと。

温厚なお師匠さま、気配り上手で家事が得意なお姉さま。そんな
二人と共に過ごしてきた私は、何故だか脳筋に育った。

押して駄目なら押しまくれと、考えている節がある。

あとこれは余談だが、今の私の自我と精神年齢は現在の体に依存
している。つまり、『私』という存在が産まれてから四十五年には

なるが、今の精神年齢は二十歳。無鉄砲なことを仕出かすお年頃だ。

そして二十年という年月は、とっても長い。

生まれ変わる前の記憶は段々と薄れていき、時折過去の家族達の

ことを懐かしむことはあっても、鮮明に思い出すことはなくなっていた。

そんなこんなで赤子から現在までを過ごしてきた新しい私は、生まれ変わる前の私と同じようっていて、どこか違うのだ。

——さてはて。決行するのは私が外出から帰ってきて、お姉さまが外界へ繋がるドアに鍵をかける瞬間にしようと思う。

勢いでやってしまうつもりではあるが、念のために比較的隙がある瞬間を狙ってみることに決めたのだ。

いつも通りに私のことを縦に抱き上げてリビングへと移動する彼の瞳が、真ん丸になっている。

私はそれを上から見下ろしながら、口をあんぐりと開けていた。

「あんだ……」

「……………」

口を開いて何かを話しかけたお姉さまが、逡巡の後に何も言わずに閉口した。

私は私で、黙り込んで瞳を忙しく左右に泳がせている。

至近距離で放った魔法が、高い音と共に跳ね返されて——見事に私に、かかったのだ。呪詛返しとも言われる、魔法反射の術だ。

まさか、お姉さまがそんな魔法を自分に使っているだなんて。想像もしなかった。

「あ、あたしを……害そうとしたんじゃないわよね？」

「う、ん……」

長年築いてきた信頼関係のお陰で、疑われる事態は避けられたようだ。安心する反面、申し訳なさが募る。

そして、まさかの事態にいつまでも鼓動がドクドクと駆けていた。

自分に、この魔法を使ったことは今まで一度もない。

安全な魔法だからおかしいことにはならないとは思いますが、少しばかり不安だ。

「……何の魔法を使ったの？」

「それは……」

ただの悪戯だと、思えなかったのだろう。

お姉さまは私の体を抱えたままソファに腰掛けると、膝の上に乗った私のことを真っ直ぐ見つめた。

「きちんと答えなさい。何の魔法を使ったのよ」

僅かに陰しくなった彼の表情が、心配なのだと言外に伝えてくれる。それに罪悪感が膨れ上がった私は、躊躇うのを止めた。

洗いざらい全てを白状するために、私は微かに震える唇をゆっくりと開く。

「ラッキースケベ、魔法を……使いました」

「……はあ？」

片眉を上げて、怪訝そうに。お姉さまはわけが分からないと顔に書いて、こちらを見据えた。

「何いつてんのよ。なんでそうなるのよ。あんたにはあたしという、オンナがいるでしょうに」

（女……）

やっぱりそこは譲れないんだ、と思いつながらも口には出さない。

お姉さまを男扱いしたり、魔法使いと読んだりすると、彼は普段の温厚さが嘘のように怒り狂うのだ。

私は過去に何度か、彼の地雷を踏み抜いてカエルに変えられた人の姿をこの目で見た。

数日そのまま放置され、元の体に戻した後には口封じの魔法を施し

ていたが、きつとカエルに変えられた張本人はトラウマになったことだろう。かくいう私も、幼い頃に彼と喧嘩をして、姿を仔猫に――とと。混乱しすぎて、関係ないことを考えてしまっていた。

「それなのに、なんであたしにその魔法を使うのよ」

「え……、だって……」

気に入くわないと言うように。お姉さまはムツスリとして、僅かに唇を尖らせた。けれど不貞腐れたのはこっちの方だ。

散々手を出しておきながら、コロツと外の女に絆されて。それでその相手と上手いかず、いっちよまえに悩んでいる様子のお姉さま。私に刺されても文句は言えまい。

――いや、刺したりしないけど。

「……………」

「…………もう、仕方ない子ねえ」

私がむつつりと黙り込んでいると、お姉さまは目を伏せて溜め息を吐いた。

私がそれにビクリと体を跳ねさせると、すぐに彼の目が開く。優しい色を湛えた瞳が私に、安心なさいと語りかけていた。

「あんたのその、自分の気持ちを飲み込む癖。なかなか無くならないわねえ。あたしや師匠の気持ちを慮るあまりに、言えなくなるんですしょ？」

——そう。私は別に、抑圧されて育ってきたわけじゃない。

ただただ優しい人達に包まれるようにして、過ごしてきたのだ。

その結果、その優しい人を傷付けたくないという気持ちが大きく育ち、自分の気持ちを口にせず飲み込むようになってしまった。

その悪癖とも呼べる癖を、お姉さまは昔から心配してくれている。「そんなに心配しなくとも、あたしはそんなにヤワなオンナじゃない

いわよ。ほーら、言っちゃいなさい。どうして、そんな突飛な行動に出たの？」

「うう、だってえ……。お姉さまが……」

あたしが？とでも言うように。お姉さまは小首を傾げて、器用に片眉を上げた。けれど口を挟まずに、私が続けるのを待っている。私は一度目を閉じて、心の中にある自分の気持ちと向き合った。

本当に害意はなかったのよと。ただ、貴方と貴方の想い人との仲をより良いものにしたかったのよと。そう主張するために気持ちを落ち着けるつもりが——ジリリと燦る嫉妬の炎が、燃え上がった。

「……お姉さまが、外に女を作るからいけないのよ」

「——は？外に、おんな……？」

意味が分からないと顔全体で表現している彼を、私はキツと睨み付けた。

ほんのちよつと目に涙が滲んでしまつたが、この際気にしないことにする。

「あんだだけ私にエッチなことをしておいて、外に好きな人が出来たんでしょ？ 私、見ちゃつたんだから。お姉さまが誰かのことを、深く愛してるって見」

「はああっ!？」

もう一度、「見ちゃつたんだから！」と続けようとした私の声を、お姉さまの「どうしてそうなる!？」という叫びが掻き消す。

私はピツと震え上がって、下向けていた視線を上げた。

——なんだかめちゃくちゃ、怒っている。

視界に入つた彼は、癖のある紫色の髪を毛を逆立てる猫のようにぶわりと膨らませ、普段は垂れている眦をキツく吊り上げていた。

これまでは横から見ていた、憤怒の表情。それを初めて自分に向

けられていると気付いて、私の体はガクガクと震え出す。

「あんた、まさか——……ふうん、そう。そういうこと。これまであたしがしてきたアプローチは、まるで響いていなかったってことね。どーりで流されるばかりで、求めてはくれなかったわけ」

「——はうっ!? お、お姉さま……!?」

不意打ちで尻臀を両方ともムギユツと掴まれて、私は文字通り飛び上がった。

肩越しに後ろを振り返り、当然だが見えなくて。慌てて今度は彼の顔を窺い見るが、非常にあくどい顔で笑いかけられてしまった。

「あたし、ものすつごく腹が立っちゃった♡」

腹が立ったと言いながらも、お姉さまはニコニコと笑っている。

そう。お姉さまは本当に怒ると、笑うタイプでもあった。

つまり絶体絶命の大ピンチであることに、変わりはない。

——しかし。カエルに変えられちゃう……！と私が震え上がると、彼は私の背中を優しい手付きで撫で下ろした。

「だから、あんたに跳ね返った魔法は、解いてあげないことにするわ♡その上で、自分で解けないようにもしてあーげる♡」

「え……っ？」

一瞬、言われた言葉の意味が理解できなかった。

数秒遅れでなんとか理解しても、どうして？と疑問に思う。

けれど動揺している私を置き去りにして、彼は行動に移すようだ。

「お、お姉さま……？」

胸の中心に彼の右手を当てられて、私はそっと彼の顔色を窺った。

「しっ。集中するから、静かになさい」

しかし静かに宥められてしまえば、もう何も言えない。

私はほんのちよつとだけ唇を尖らせて不服を表しながらも、彼が

言うように静かにした。

「ん……」

彼の手が触れている場所が、じんわりとあたたかい。

体の奥深くまで浸透していくその温もりはとても心地好くて。私は目を伏せて、静かに感じ入った。

「可愛いわねえ……」

「ん……？」

ふとポツリと溢された呟きが聞こえてきて、私は目を開けた。

すると見下ろす位置にあるお姉さまの整った容貌が——怒ってはいたはずのその顔が、トロリと甘く蕩けていた。

「怒ってたはずなのに、気が削がれちゃった。ねえ、ずるいと思わない？ あたしはそう思うわ」

「ええ……？」

胸元からカチリと鳴った音に視線を下向け、首を傾げれば。また、可愛いわねえと彼が呟く。

こめかみに優しく口付けられ、腰を撫でられて。そうして怒られていたはずなのに甘やかされながらも、私は自分の体に集中していた。

（本当に、跳ね返った魔法がロックされてる……）

彼は宣言通りに、私にかかったラッキースケベの魔法を、自力で解けないようにしてみたかった。

どうにか解こうとしてみても、流し込もうとした魔力が弾かれる。「んもう、悩んでるなら相談してくればよかったのに。そうしたらいくらでもあたしの愛をあんたの体に刻んで、疑いようがないくらいドロドロに、溶かしてあげたわよ♡」

「え？あ、いや……はうっ!？」

困惑していれば彼の右手が胸の中心から下りていき、服の上から下腹部に触れた。そして子宮がある辺りを、指先でグツと押す。

「ここにたあっふりと子種を仕込んで、妊娠だつてさせてあげたわよ♡もちろん、産んでいいわ。妊娠も出産も大歓迎♡大賛成♡だつてあたし達の赤ちゃんだもの♡ぜーったい可愛いわよねえ♡♡」
「は……っ？あ、あう……っ」

するりと更に手が下に移動して。割れ目の上にある突起を、むにゆりと指先が押し潰した。

それから立て続けにぐにゅぐにゅとそこを揉まれて、私の口からは「あっ、あっ」と小さな嬌声が漏れていく。

「さあ、ベッドにいきましよう？きちんと相思相愛だと分かったんだもの♡今日こそは、あたしのこれをあんたの中にハメるわよ♡」
「えあっ!?!お、お、おちんちん……?」